

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 暴力の時代の歴史化をめぐる断章：証言と余白

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細谷, 広美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001664">https://doi.org/10.15021/00001664</a>

## 暴力の時代の歴史化をめぐる断章

——証言と余白——

細谷 広美

神戸大学国際文化学部

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. 1998年アヤクチョ県       | 4. 1997年アヤクチョ県サルワ村   |
| 2. 2003年8月28日        | 5. 真相究明と和解委員会とアヤクチョ県 |
| 3. 2003年8月29日 アヤクチョ市 | 6. 暴力の時代の歴史化と再記憶化    |

強制収容所、絶滅収容所の生残りたちの報告は非常にたくさんあるが、その千篇一律なことには驚かされる。これらの証言は真実であればあるほど、ますます伝達力を失い、人間の理解力と人間の経験を越えたことをますます淡々と語るのである。(アーレント 1974: 232)

### 1. 1998年アヤクチョ県

1998年のことである。私はアヤクチョ県のある村で、祭りや儀礼について調査をしていた。山岳部に位置するアヤクチョ県はペルーで最も貧しい県のひとつであり、1980年にアビマエル・グスマン・レイノソをリーダーとする毛沢東系の集団「ペルー共産党——センドロ・ルミノソ (Sendero Luminoso 輝ける道)」(以下センドロ・ルミノソと略す)が、武装闘争を開始した地でもある。グスマンはアヤクチョ県の中心アヤクチョ市にある国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学の元哲学教授であった。混血のメスティーソの若者たちを中核として、毛沢東の教えに倣い、「農村が都市を囲む」という戦略をとったセンドロ・ルミノソは、農村部からアヤクチョ市へと勢力を拡大した後、1988年以降は首都リマへと本格的に侵出し、国家を未曾有の危機的状況へと陥れた。アヤクチョ県には特殊警察であるシンチス (shinchis) に続いて1982年12月に軍が派遣され、政府軍とセンドロ・ルミノソ双方による住民の虐殺がおこなわれ、汚れた戦争が展開した。

当時はまだ、アヤクチョ県の多くの人々にとって暴力の時代の経験について語ることは難しかった。リーダーであるグスマンが1992年9月12日に第一次フジモリ政権下で逮捕されたとはいえ、いまだセンドロ・ルミノソに対する恐怖が残っていた。また、その傷があまりにも深いために、自らの経験を整理し回顧して話すことができる時期には到っていなかった。

暴力の時代について直接語られることが少なかったとはいえ、調査中、その傷痕は十分感じ取れた。たとえば私の調査に同行してくれた村出身の若者は、両親の家ではなく親戚の家に泊まり続けた。最初の手配ではリマに住む彼の叔母が同行してくれるはずで

あったが、帰郷した際に近隣の村に行く途中で山中の洞穴にある秘密墓地を見つけ、その精神的ショックで調査に同行することが難しくなった。このため、急遽彼に頼むことになった。若者はアヤクチョ市に住み、所帯をもっている。彼が実家にあまり行こうとしなかったのは、子供の頃からアヤクチョ市の親類の家で暮らしたことに起因する。暴力の時代、センドロ・ルミノソが農村部で少年たちの誘拐をおこなったため、多くの村で両親は親類縁者を頼って息子たちをアヤクチョ市や首都リマへと送った。彼もそんなふうにしてアヤクチョ市の親類の家で成長した。アヤクチョ市はメスティーンが多く住む都会であり、一方両親は農牧業を営むケチュア語話者のインディオ農民である。泊めてもらっていた彼の親戚は、彼の父親は村の慣習を知らず、家畜の世話もきちんとできない息子に厳しくあたると説明した。

約1ヶ月間過ごすなかで、ある夜、食後にコーヒーを飲みながら、泊まっていた家の夫人と、若者と私の3人の間で話がはじまった。その夜、彼女の夫は不在だった。2人は汚れた戦争の時代の経験について語りだし、会話は夜更けまで続いた。夫人は自分の兄の話をした。他村出身の彼女がまだ結婚する前、村にセンドロ・ルミノソのメンバーたちがやってきて、男たちを全員集めた。センドロ・ルミノソは何らかの作業に動員するために、村の男たちのなかから選別し連れて行こうとした。そのなかには彼女の父も入っていた。すると、その時、彼女の兄が、父はもう年老いているので、自分が代わりにいくと名乗りでた。その後、彼女の兄を含め、連れ去られた男たちは誰一人再び村に戻ってくるのがなかった。彼女は、兄はとても優しく良い人であったと繰り返した。

また、彼女はこんな話もした。不在であった彼女の夫は小学校の教師である。現在は出身村に住み教師をしているが、暴力の時代は別の離村の学校の教師をしていた。その村もセンドロ・ルミノソの支配を受け、学校で働いていた教師たちはセンドロ・ルミノソの教義を子供たちに教えることを強制された。彼女の夫はそういったことに耐えられなくなって、ある時、夜陰にまぎれて抜け出し自分の村へと逃げ帰ってきた。その後、村に残った教員たちはセンドロ・ルミノソによって全員殺害されてしまった。

これらの話をした後、彼女は記憶を振り払うかのようにランプを消し、私たちは部屋に帰ることになった。彼女自身もセンドロ・ルミノソの攻撃を逃れて、食べるものもないまま赤子を抱えて山や畑で夜を明かした経験をもつ。

アウシュヴィッツから帰還したブリーモ・レーヴィは次のように語る。

それからどの証言にももう一つ欠けているものがあります。証人というのはそもそも生き残った人びとですから、みな収容所で何らかの特別待遇に与った者たちなのです。これは私自身にも当てはまることです。もし科学者でなくて、ドイツ語を少し知らなかったら、私の運命は変わっていたでしょう。大多数の囚人の運命について語った者は誰一人いません。と言うのも物理的に彼らには生き残る可能性がなかったのです。(レーヴィ 2002: 226)

証言者の証言は、差延を前提とする。それは生き残った者の証言だからである。もとより死者たちの証言は存在しない。不在の死者たちの存在によって、証言はある種の欠落を抱え込む。証言者は死者たちを代弁しようとする時、死者たちの無数のまなざしを背後に感じる。それ故、この差延により証言者たち自身も不在の死者たちの世界と生者の世界との間に引き裂かれる。

## 2. 2003年8月28日

2003年8月28日、ペルーではサロモン・レルネル・フェブレスを委員長とする真相究明と和解委員会（Comisión de la Verdad y Reconciliación: CVR）が最終報告書を政府に提出した。真相究明委員会は2000年にフジモリ大統領が日本に逃亡した際の、バレンティン・パニアグア暫定政権において2001年に設置が決定された。その後、アレハンドロ・トレド政権下で「和解」（Reconciliación）という言葉が付け加えられている。真相究明と和解委員会は、ペルーでセンデロ・ルミノソが武装蜂起した1980年から2000年に起こったことを解明する目的で設置された。

報告書は1980年から2000年までの犠牲者数を69280人と算出した。犠牲者の数値は委員会による調査によって名前が確認された数に、統計的処理が施されている。犠牲者数には死者と行方不明者（desaparecido）が含まれる。ラテンアメリカにおいて行方不明者は独特の意味をもってきた。チリやアルゼンチンの軍事政権下で連行され拷問を受けた後殺害された人々の多くは、その行方と死の事実が確認できないために行方不明者と呼ばれてきた。委員会が算出した犠牲者のなかに含まれる行方不明者は、死者となっている可能性が高いが死が確認されない人々を意味している。今でも農村部には多くの秘密墓地が存在する。

報告書は犠牲者のうち、46%がセンデロ・ルミノソによるもの、30%が政府軍をはじめとする国家によるもの、24%がその他の原因によるものとした。その他の原因には MRTA（Movimientos Revolucionarios Tupac Amaru トウパック・アマール革命運動）、農民自警団（Rondas campesinas）、自警団（Comité de autodefensa）等によるもの、戦闘のなかで判明しなかった人々などが含まれる。日本では1996年から翌年にかけて MRTA による日本大使公邸占拠事件があったことから、センデロ・ルミノソよりも MRTA の名の方が知られているが、犠牲者数からもわかるように当時ペルーにおいて最大の問題となっていたのは、センデロ・ルミノソによる活動であった。日本企業や ODA もセンデロ・ルミノソの攻撃の対象となってきた。1991年には国際協力事業団が派遣した3名の日本人農業技術者が、センデロ・ルミノソによって殺害されるという事件も起きている。

真相究明と和解委員会の報告書が明らかにした重要な点の一つは、犠牲者のうち約75%がケチュア語話者をはじめとする先住民族言語の話者であったことである。つまり、

犠牲者のうち、先住民族の割合が著しく高かったことが、数字という目に見えるかたちで示されたのである。このことは暴力の時代を特徴づける (Hosoya 2003)。

真相究明と和解委員会の最終報告書は9巻に及ぶ膨大なものである。調査から報告書の作成、提出までの期間が約2年であったことを鑑みれば、委員会は最善を尽くそうとしたことが伺える。この報告書の重要性を否定することはできない。しかし、真相究明と和解委員会による報告書は、提出される以前から様々なレベルでの議論を引き起こす一方、政治的議論に巻き込まれることになった。最終報告書の提出自体に関しても、当初定められていた日程から延期されるという情報が数度にわたって流布した後、予定通り提出された。

### 3. 2003年8月29日 アヤクチョ市

真相究明と和解委員会が首都で大統領に報告書を提出した翌日の8月29日には、被害が最も深刻であったアヤクチョ県の中心アヤクチョ市でも、報告書提出がおこなわれた。アヤクチョ県の犠牲者数は全体の40%以上を占めている。式典はペルーを代表する劇団ユヤチカニの演出家であるミゲル・ルビオ・サパタが演出した。アヤクチョ市の中心広場プラサ・デ・アルマスに、巨大なレタブロ (retablo) が建造され、そこが報告書提出の舞台となった。

レタブロは、元来は持ち運び用の箱型祭壇を意味しており、木製の扉がある長方形の箱のなかに、聖人像がおさめられる。巡礼者たちが担いで運ぶこともあるし、農村部でおこなわれる家畜儀礼の際に、家畜の守護神である聖人像をメサ (mesa) と呼ばれる祭壇に祀る。しかし、20世紀中頃から人々の生活や祭りを表現するレタブロも制作されるようになった。この背景には、ペルーの知識人たちによるインディヘニスマ (先住民族主義) 運動において、民衆文化の再発見がなされたことがある。アヤクチョ県は民衆芸術としてのレタブロを代表する地となり、ロペス・アンタイをはじめとする著名なレタブロ作家を輩出してきている。報告書の提出の舞台としてレタブロが選ばれたのは、こうしたアヤクチョ県の民衆芸術としての位置づけと、鎮魂の双方の意味が込められていたと考えられる。

報告書の提出にあわせ、アヤクチョ市では一つの重要な展覧会が開かれた。それはレタブロ芸術家として知られるエディルベルト・ヒメネスによるものであった。エディルベルトの父フロレンティノ・ヒメネスは、ペルーを代表するレタブロ作家の一人であり、その伝記も出版されている (Clemente 1987)。筆者が1998年に調査で滞在したのはヒメネス家の故郷の村であった。ヒメネス家の兄弟姉妹はレタブロ制作を仕事としており、イタリアやアメリカにも工房をもっている。両親や兄弟姉妹が首都リマに移住するなかで、エディルベルトだけはアヤクチョ市に住むことにこだわり続けてきた。他の兄弟姉妹と

異なり、仕事として作品及び民芸品としてのレタブロをコンスタントに制作することはないが、父のフロレンティノが息子たちのなかで最も優れた作品を作ると評価している人物でもある。1988年にはじめて彼の工房を訪れたとき、「あるインディオ女性の夢——アヤクチョ県の8年」と題する製作中のレタブロを見せてもらった。完成したその作品は、現在は首都にあるペルー問題研究所（IEP）の図書館に飾られている。

その作品は、子供たちを抱いて眠るインディオの女性を中心に周辺で物語が展開するという、従来のレタブロとは異なる独創的な構図のものだった。物語は夫がセンドロ・ルミノソのメンバーと誤認され、政府軍に逮捕されるところからはじまる。牢に入れられ、拷問を受け獄死した夫の遺体は放置され犬が食む。それを見て哀れんだキリスト教の神とアンデスの土着の神である山の神が、夫の魂を天に救い上げる。山の神の洞窟では神の富である黄金が光り輝く一方、子供とともに眠る女性の下からは血が溢れ出ており、センドロ・ルミノソが80年に武装蜂起した後のアヤクチョ県の血に塗られた歴史を象徴する。

真相究明と和解委員会の提出にあわせて開催されたエディルベルトの展覧会は、しかし、レタブロ作品ではなかった。彼は線描画を描くことに挑戦した。レタブロの趣を残すその作品は、彼が農村部で書いた暴力の時代の記憶と、それをもとに描いた絵から構成されていた。エディルベルトは真相究明と和解委員会や人権団体のもとで、C村で調査をおこなってきている。C村はセンドロ・ルミノソによる支配を長期に亘って受けた村だった。アンデスのボル・ポトとも呼ばれたセンドロ・ルミノソは、その教義において家族の単位を否定し、夫と妻、両親と子供を分け支配した。センドロ・ルミノソによる支配に続き、軍による殺戮も起こった。そこには、子供たちが集団虐殺される際、せめて最期に怖い思いをしないように子供の目を覆い隠してあげることしかできなかった母親の話、人肉を食べることを強制された話など、数々の凄惨な証言と証言に基づいた絵が描かれていた。

エディルベルトの作品は「現代のワマン・ボマ」を髣髴とさせるものだった。ワマン・ボマは植民地時代のインディオ出身の記録者である。ワマン・ボマの記録はケチュア語まじりの、スペイン語としては文法的に不正確な言葉で書かれているということで、当初は黙殺された。しかし、現在は彼が文字資料とともに残した夥しい数の絵が貴重な資料となっており、多くの研究者がこの記録の研究に取り組んでいる。欧米流の絵画教育を受けたわけではなく、独学のエディルベルトの作品はどこかワマン・ボマを喚起させる筆致で描かれていた。それだけでなく、そこに描かれた出来事は暴力の時代と植民地時代との相関性を想起させるものだった。

センドロ・ルミノソと政府軍双方による住民の虐殺が繰り返された汚れた戦争の時期、アヤクチョ県ではピシュタコという妖怪をめぐるうわさが流布した（細谷2002）。ピシュタコは夜間に人気がないところで人々を襲い人間の脂肪を抜き取る。脂肪を抜き取

られた犠牲者は何が起こったのかわからないまま衰弱して死に至る。ピシュタコに連なる妖怪に関する記述はすでに植民地時代の記録のなかにみられる。植民地時代のピシュタコは、カトリックの僧やスペイン人の姿をしていた。ピシュタコは人間の脂肪でできた高価な薬をつくるためにスペイン国王が派遣したと語られた。

ピシュタコはその後も姿を変えながら人々の前に姿を現してきた。キリスト教の僧や外国人の姿をしているとされるのはそのまま連続しているが、他方で、メスティーソや農園主（アセnderド）、技師や医師もピシュタコとされる。ピシュタコは大統領によって派遣されている、あるいはピシュタコがとった人間の脂肪は先進国の工業化に貢献しているという言説も生まれている。

そして、汚れた戦争の時代には、ピシュタコは政府軍の兵士の姿をとるようになった。軍や警察による不法逮捕やセンデロ・ルミノソと軍の双方による住民の虐殺が繰り返され緊張が高まるなか、外国人が住民に投石されたり、比較的色が白いワンカヨの商人が、ピシュタコと誤った住民にリンチにあい殺害されるという事件が起こった。

ピシュタコはインディオ農民にとっての他者を表象すると同時に、その他者が彼らに加える暴力を表象してきた。そして、他者が先住民族に加える暴力が過酷であればあるほど、ピシュタコはより残酷な存在となった。ただし、なぜピシュタコが脂肪をとるのかということは疑問として残っていた。動物の脂肪はアンデスの先住民族の人々が信仰する山の神や大地の神パチャママへの重要な供物を構成している。しかし、それだけで説明するには不十分にみえた。

そのような折、先住民族の虐殺がおこなわれ、1992年のリゴベルタ・メンチュウのノーベル平和賞受賞で知られる、グアテマラの軍事政権化で起こった人権侵害について調査している歴史的記憶の回復プロジェクトの報告書で次のような記述に遭遇した。

家から外に向かって焼けこげた脂が流れていました。わかりますか。かわいそうな女たちの脂がだぶだぶ流れていたんです。雨が降って水が溝を流れるように。真水のように脂が流れてきたんです。私も何だろうって思いましたよ。中に入ってみると、哀れな女たちからたくさん脂が流れだしていたんです。(証言 6070 ウエウエテナンゴ県ベタナック 1982年) (歴史的記憶の回復プロジェクト2000: 139)

虐殺と脂肪、この関係はその現場から立ち現れてくる。ピシュタコが人間の脂肪を抜き取ることの背景には、先住民族の身体観や神々への貴重な供物としての位置づけがあるであろう。しかし同時にそこには先住民族の人々が経験してきた虐殺の記憶が埋め込まれている。

ピシュタコは植民地時代以来、姿を変えながら人々の周囲を徘徊してきた。この妖怪の存在は、征服と植民地支配が先住民族の人々にもたらした暴力の傷痕と、それが独立

後の国民国家の内部においても再生産され続けてきている軌跡を雄弁に物語っている。

ポストコロニアルについて整理したアーニャ・ルーンバは、「それが生じた特定の土地の状況というルーツから引き離されてしまうと『ポストコロニアル性』を探求しても意味がなくなる」(ルーンバ 2001: 38) と指摘している。アンデスのポストコロニアルの特徴は、宗主国スペインからの独立が、征服の時点で支配された先住民族ではなく、新大陸生まれの白人クリオーリョ (criollo) たちによって達成されたことにある。しかもクリオーリョという存在はインディオの血や黒人の血が混じれば、メスティーソやムラートになってしまうという排除の論理に基づいていた。つまり、人種の観点からみれば、独立は植民地支配が作り出した人種間のヘゲモニー関係を大きく変えることがなかったのである。そして、独立によって国境線がひかれることで、先住民族の人々はペルー国民となり国民統合の対象となってきた。ピシュタコという存在が、様々な因子とともに人種と密接に関係しているのはこのような理由による。

先住民族が経てきた歴史は、征服、植民地支配、独立、国民国家の建設という国家の歴史には単純に回収できない側面がある。国家の歴史が独立後に生まれた国家の領土という地理的空間を基盤として構築されてきたということに目を向けただけでも、領域内に住む先住民族の人々の歴史は、国家の歴史を微妙にすり抜けていってしまう。

#### 4. 1997年アヤクチョ県サルワ村

1997年に私はタブラ (tabla) と呼ばれる板絵の民衆芸術で有名な、同じくアヤクチョ県のサルワ村にいた。サルワ村はセンデロ・ルミノソが武装闘争を開始したチუსチ村とパンパス川をはさんだ向かい側の位置にある。タブラは、もともとは家を新築する際の棟上げの儀礼において、世帯主の縁者がその家族の物語等を描いた細長い板を贈るという習慣から生まれた。その筆致はカトリックの布教という目的のもとに植民地時代にアンデス各地に建設された教会のレリーフと通じる部分がある。レタブロが民衆芸術になったように、タブラも村の祭りや日常を描いた独特の絵図が、梁になるような細長い板ではなく、西洋の絵画のように四角い板に描かれるようになり、民芸品と同時に民衆芸術となった。しかし、サルワ村のタブラ制作者たちも暴力の時代に首都へと移住した。現在はリマにサルワ村出身の民芸品制作者たちの団体がある。

その年は唯一村に残って制作を続けているタブラ作家の家を訪れ、サルワ村が経験した汚れた戦争をテーマにした作品を見せてもらいながらインタビューをしていた。その折、異なる時間の流れに放り込まれることになった。汚れた戦争の当時まだ少年であった彼は、15、6歳の少女3人が政府軍の兵士たちに強姦され谷に投げ捨てられたこと、罪のない村人たちが軍に連行され帰ってこなかったことなど、様々な出来事を語ったが、彼の話は、汚れた戦争の時代について語りながら、時には農園主が村に送り込んだ政府



軍の話にすり変わっていることがあった。そのうちに、彼らの歴史が、政府軍というキーワードにおいては波のように繰り返されていることがわかってきた。村の人々にとっては政府軍との経験は暴力の時代が初めてではなかった。見方を変えればそうした国家との経験の延長線上で汚れた戦争も展開したのである。つまり、暴力の時代は、国家の時間と重なりつつずれる村の人々の時間の流れのなかにもその位置を占めている。

## 5. 真相究明と和解委員会とアヤクチョ県

アヤクチョ県は真相究明と和解委員会の調査において要の地の一つであったが、委員会の調査に対する住民の反応は、必ずしも好意的なものではなかった。真相究明と和解委員会が政治的議論に巻き込まれていくなかで、委員会に証言することを拒否するという動きもみられた。

しかしながら、その原因の一端は委員会の調査方法そのものにもあった。アヤクチョ県の都市と農村部は人種的にも文化的にも言語的にも異なる。しかし、調査は住民参加型ではなく、首都リマの専門家や研修を受けたアヤクチョ市のバイリンガルの人々を、農村部に短期間派遣するというかたちで実施された。

たとえばあるルカナマルカ村出身者は、真相究明と和解委員会は村でセンデロ・ルミノソによる虐殺について調査したが、政府軍がおこなった虐殺については調査しなかったと批判した。ルカナマルカ村で起こった事件は、暴力の時代の歴史を語るうえで重要な出来事の一つとなっている。1983年4月3日にセンデロ・ルミノソはこの村を襲い、子供を含む69名の村人を殺害した。顔半分を汚れた包帯で覆った虐殺の生存者の写真は強い印象を与え、委員会の最終報告書の提出にあわせて組まれたテレビの報道番組等でも、この村の映像が何度も流れた。

委員会のもとでルカナマルカ村での調査に参加したメンバーの一人によると、委員会では専門家を同伴し、センデロ・ルミノソによる秘密墓地の調査をおこなった。死者の身元確認をおこなう秘密墓地の調査には時間と費用がかかるため、限られた時間では選択して調査せざるをえない。このため、ルカナマルカ村ではセンデロ・ルミノソによる秘密墓地を選び調査を実施した。

委員会が調査対象をセンデロ・ルミノソの行為に限り、政府軍に関しておこなわなかったというわけではないが、20年間に亘って起こったことをわずか2年たらずの期間で調査し報告書を作成しなければならなかったため、取捨選択や統計的処理という方法もとらざるをえない。しかし、それは実際に暴力の時代を経験した村人の側からみれば必ずしも納得できるものではなかった。調査が外部から来た人々によって実施され、村の人々が暴力の時代の経験から精神的及び社会的に回復するための契機を提供しえなかったことは、今回の調査で広範にみられた限界であった。つまり、後から付加された「和

解」という局面にまでは、委員会は踏み込むことができなかったのである。

もう一つの背景としては補償問題があった。アヤクチョ県は暴力の時代における象徴的な地であることから、センデロ・ルミノソのリーダーであるグスマンの逮捕後多くのNGOが活動を開始した。このため、それまでのNGOとの経験から、アヤクチョ県の人々の間では委員会が調査をはじめたとき、証言することによって何らかの援助が得られるのではないか、もしくは補償がおこなわれるのではないかという期待が生まれた。もとより、委員会の調査自体はそのような性格のものではなかったが、こうした期待が裏切られたことも、委員会に対する疑念と不満を引き起こすことにつながった。

## 6. 暴力の時代の歴史化と再記憶化

真相究明と和解委員会による最終報告書の提出は、ペルーにおいて暴力の時代の歴史化がはじまったことを意味する。報告書の提出にあわせて委員会が開催した写真展“Yuyanapaq. Para recordar (記憶するために)”及びその写真集(CVR 2003)、有力週刊誌カレタス(Caretas)が出版した写真集(Caretas 2003)等は、暴力の時代を視覚的に辿ることを可能にした。TVや新聞、雑誌などのメディアも特集を組んできた。これらは暴力の時代の物語化に寄与している。

渦中にいるとき、人々はその全体像を見渡すことができない。危険を回避するための技術が日常的に行使されたとしても、暴力の時代を共時的に経験している間、人々は断片的な情報しか得ることができなかった。報告書の提出とともに、漸くその全体像をクロニカルに振り返り検証することが可能となった。これにより人々は歴史化されつつある暴力の時代の文脈のなかに個々の経験、記憶を位置づけはじめている。他方で、暴力の時代には当時まだ生まれていなかったか、もしくは幼かった若者たちにとっては、ペルーで展開した出来事の歴史を知る機会となった。つまり、真相究明と和解委員会による最終報告書の提出とそれにまつわる一連の出来事は、人々が暴力の時代を回顧するための基盤を提供しはじめていたのである。

『記憶の場』のシリーズを編集したフランスの歴史学者ピエール・ノラは、記憶を「直接的な記憶」と「間接的記憶」に分け、後者は「歴史を通過することによって変容した記憶」であるとする(ノラ 2002: 38-39)。ノラ概念を借りれば、暴力の時代の歴史化がおこなわれることで、間接的記憶が生成しはじめている。言葉を換えれば、暴力の時代の公的な歴史(official history)が形成されつつある傍らで、再記憶化が進行しているのである。

報告書の提出は、暴力の時代に起こったことに取り組むうえでのあくまではじまりである。このような観点からみると、真相究明と和解委員会が2004年に出版した最終報告書の概略書に、ケチュア語で *Hatun Willakuy* (gran relato 大きな物語、報告書の意) という、

往々にして公的歴史もしくは正史を意味してしまうタイトルがつけられたことは、いささか皮肉な感がある。

アヤクチョ県でインタビューしたある若者は、祖父をセンドロ・ルミノソに、父を政府軍に殺害された。このため若者の母親は当時3歳だった息子を連れて着の身着のまま村をあとにした。彼の母は深いトラウマによって、いまでも日常生活を送ることが困難になることがある。彼は将来子供たちに伝えるために、毎晩農作業の後、出身村で家族が経験した殺戮をスペイン語でノートに書き記した。両親ともケチュア語話者であり、しかも暴力の時代の只中で成長したため、十分な学校教育を受けることができなかった彼は、スペイン語を書くことや、断片的に語られる母の経験を言葉にすることに難渋し、約1年を費やした。なぜ自分には父がいないのか。なぜ多くの人々が理不尽なかたちで殺されなければならなかったのか、今もその答えを探し続けている。

暴力の時代についての歴史は多様な物語のひとつである。そしてそれらは未完の物語でもある。

## 文 献

アーレント, ハンナ

1974 『全体主義の起源3』大久保和郎・大島かおり訳, 東京:みすず書房。

Caretas

2003 *La verdad sobre el espanto: El Perú en los tiempos del terror*. Lima: Caretas.

Comisión de la Verdad y Reconciliación

2003 *Yuyanapaq. Para recordar*. CVR.

Clemente, Edilberto Huertas

1987 *Vida y obra de Florentino Jimenez Toma*. Lima: CEDAP.

細谷広美

1997 『アンデスの宗教的世界——ペルーにおける山の神信仰の現在性』東京:明石書店。

2002 「植民地主義と他者表象——ペルーの『ピシュタコ』をめぐる語りの諸相」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』pp.415-443, 西宮:関西学院大学出版会。

Hosoya, Hiromi

2003 *La memoria post-colonial: tiempo, espacio y discursos sobre los sucesos de Uchuraccay*. Lima: IEP.

2005 「歴史とポストコロニアル——ペルー, ウチュラハイ村事件と先住民族のテロ経験」  
遅野井茂雄・村上勇介編『現代ペルーの社会変動』(JACS 連携研究成果報告7), pp.53-89,  
国立民族学博物館地域研究企画交流センター。

レーヴィ, プリーモ (マルコ・ベルポリーティ編)

2002 『プリーモ・レーヴィは語る 言語・記憶・希望』多木陽介訳, 東京:青土社。

ルーンバ, アーニャ

2001 『ポストコロニアル理論入門』(松柏社叢書14 言語科学の冒険) 吉原ゆかり訳, 東京:松柏社。

ノラ, ピエール編

- 2002 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史1』谷川稔監訳，東京：岩波書店。  
歴史的記憶の回復プロジェクト編
- 2000 『グアテマラ 虐殺の記憶 歴史的記憶の回復プロジェクト』飯島みどり・弧崎知己・新川志保子訳，東京：岩波書店。
- 友枝啓泰
- 1986 『雄牛とコンドル——アンデス社会の儀礼と民話』東京：岩波書店。

## 資料

Comisión de la Verdad y Reconciliación (CVR)

- 2003 *Informe final de la Comisión de la Verdad y Reconciliación.*

